国際結婚家庭に育つ子どもの言語選択：
会話参加者の存在が及ぼす影響

時田　朋子

概要

This study investigates how bilingual children born to international marriage couples use languages, focusing on their language choice. Although previous studies have indicated that bilingual children choose languages according to listeners, little is known about indirect listeners who are at a conversation site but do not participate in the conversation. To determine whether indirect listeners affect bilinguals' language choice, we constructed a corpus of two families' conversations at home. Here we found that, when two bilingual children talked to their Japanese-speaking mothers, the rate of their Japanese use was changed according to the presence of their fathers who are not fluent in Japanese. This finding demonstrates that two parents are desirable to be fluent in their two languages so that their children use both languages frequently.

キーワード: バイリンガル児、言語選択、家族間の会話、コーパス (Bilingual Children, Language Choice, Family Conversation, Corpus)

１．はじめに

近年の国際結婚の増加に伴い、家庭において２つの言語に接触して育つ子どもが増えている。この子どもたちの中には、誕生と「同時に」２つの言語に接触し、バイリンガルとなる者も少なくない。この特徴から、この子どもたちは「同時バイリンガル」と呼ばれる。しかし、ほとんどの場合

2つの言語は社会における位置付けが異なり、それは同時バイリンガルが習得する2つの言語間に使用や能力の差異を生み出す。

カナダのバンクーバーには、カナダ人と国際結婚をして家庭を築く日本人が少なくない。バンクーバーは英語圏であるため社会で使用される言語は英語であるが、日本語はマイノリティ言語であるため家族やコミュニティの人々との会話などに使用が限定される。家族間の会話は日常的な日本語使用を可能にするが、両親が英語母語話者と日本語母語話者であることや子ども自身が学校や社会で日常的に英語に接触していることから、英語が使用されることも多い。それでもやはり、同時バイリンガル児が日本語を日常的にもっとも使用する会話は、家族間で行われるものであろう。それゆえ、家族間における言語使用は、子どもが将来的に日本語を維持するか否かという問題に大きな影響を与えることになる。

本稿は、同時バイリンガル児の家族間における言語使用状況を明らかにするため、日本語と英語が使用されるバンクーバー居住の国際結婚家庭に育つ子どもの言語選択に着目し、その要因の解明を試みる。まず、先行研究が家族間の会話における言語選択の要因として示した見解を検証する。そこから示唆される間接的な聞き手すなわち会話参加者の存在に焦点を当て、この要因が同時バイリンガル児の言語選択にどのように影響を及ぼすかについて、家族間の会話から構築したコーパスを用いて分析をする。

2．家族間の会話における同時バイリンガル児の言語選択の要因

同時バイリンガル児が家族間の会話において行う言語選択の要因は、発話内的側面と発話外的側面から検討されてきた。発話内的要因として、先行研究は、親の使用言語に応じた選択 (Lanza, 2004; Döpke, 1992) や同時バイリンガル児自身の言語能力 (Mishina-Mori, 2011)、心理的側面から親に対するアコモデーション (時田, 2008)、言語機能 (時田, 2010) などを指摘している。一方、発話外的要因としては、一般的なバイリンガルを対象としてではあるが、聞き手や場面、トピックなどが指摘されている (例：Fishman, 1965)。

複数言語が使用される家族間の言語使用を分析したYamamoto (2001) やDeprez (1994) は、アンケートやインタビューを通した調査からバイリンガルが聞き手に応じて言語選択を行うことを示した。以下では、先行研究が明らかにした国際結婚家庭における言語選択の発話外的要因を、同時バイリンガル児の言語使用に焦点を当てて検討を進める。

日本居住の国際結婚家庭における言語使用状況を明らかにするため、Yamamoto (2001) は、日本語と英語が使用される118家族の日本語母語話者の親を対象にアンケートとフォローアップインタビューを実施した。子どもの年齢は、就学前後が多いものの、3歳から28歳と広範囲にわたる。その結果、まず、日本語母語話者の親に対して、50.7%が日本語のみを、42.6%が2言語を、6.7%が英語のみを使用していることが明らかになった。一方、英語母語話者の親に対しては、42.6%は英語のみを、42.1%は2言語を、15.3%は日本語のみを使用していた。これより、親の母語つまり聞き手の言語能力に従って、子どもが言語を選択していることがわかる。ただし、日本においてマイノリティ言語であるにもかかわらず、英語が比較的使用されている点を指摘しておきたい。学校における教授言語が英語であったり、日本における英語の地位の高さゆえ、頻繁に英語を使用する子どもがいるのである。

そのため、同じ日本語と英語の組み合わせであっても、カナダにおいては状況が大きく異なる。時田 (2008) は、実際に行われた会話をデータとして、バンクーバー居住の日英同時バイリンガル児の言語選択を記述した。対象は、父親が英語母語話者、母親が日本語母語話者である小学生男児のいる2家庭である。まず、家族Aについてである。詳細は図1に示すとおりである。小学5年生男児 (A-G5) は、父親に対しては英語のみを、母親に対しては英語を83.3%そして日本語を16.7%の比率で使用した。小学2年生男児 (A-G2) についても同様の傾向が見出され、父親に対しては英語のみを、母親に対しては英語を73.8%そして日本語を26.2%の比率で使用した。両親から子どもに対する言語選択も見ておきたい。父親から子どもに対し

ては英語のみの使用であった。つまり、父子間で使用された言語は英語のみであった。母親から子どもに対しては、A-G5については日本語が92.1%、A-G2については日本語が96.8%であった[1]。つまり、母子間においては、母親から子どもに対してはほとんど日本語が、子どもから母親に対しては英語と日本語の2言語が使用されていた。なお、父母間では、父親から母親へは英語のみであったが、母親から父親へは英語が高い比率を占めるものの日本語も用いられていた。また、兄弟間では英語のみが使用された。

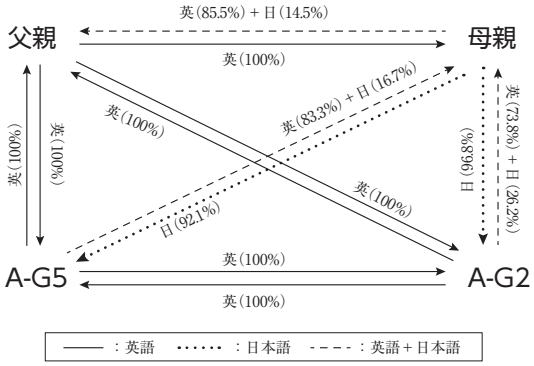

図1　家族Aにおける聞き手に応じた言語選択

次は家族Bについてである。詳細は図2に示すとおりである。小学3年生男児 (B-G3) は、父親に対しては99.5%とほとんど英語を、母親に対しては日本語を82.8%そして英語を17.2%の比率で使用した。父親からB-G3に対しては98%が英語であった。つまり、父子間で使用された言語はほとんど英語であった。母親からB-G3に対しては、日本語が97.9%であった。つまり、母子間においては、母親から子どもに対してはほとんど日本語が、子どもから母親に対しては英語と日本語の2言語が使用されていた。なお、父母間では、父親から母親へは英語が68.2%で日本語が31.8%という2言語使用であり、母親から父親へは96.2%とほとんど日本語であった。

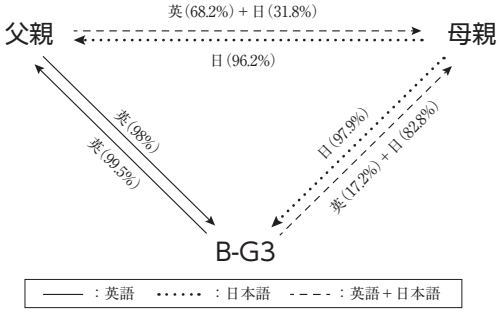

図2　家族Bにおける聞き手に応じた言語選択

以上から、家族間の会話において3人の同時バイリンガル児が聞き手に応じて言語選択をしていることが確認された。英語母語話者である父親に対しては3人とも英語を選択し、父親も子どもたちに英語を選択していた。一方、日本語母語話者である母親に対しては、家族Aと家族Bで比率は異なるが、2言語を使用するという点は共通していた。両家族の母親とも英語を高いレベルで習得していることが、日本語のみの使用ではなかった大きな理由として挙げられる。つまり、同時バイリンガル児は、聞き手の言語能力に従って使用する言語を選択しているのである (cf. Kwan-Terry, 1992; De Houwer, 1995)。

しかし、同時バイリンガル児の言語選択の発話外的要因を聞き手の言語能力のみとすることは難しい。なぜなら、話し手は多様な発話外的要因を考慮しながら言語選択を行うからである。そのひとつに、間接的な聞き手の存在、すなわち直接的な聞き手はないが会話に参加している人の存在が挙げられる。そこで、以下では、直接的な聞き手でない会話参加者の存在、すなわち会話参加者の言語能力が、同時バイリンガル児の家族間における言語選択にどのような影響を与えているかを分析する。

3．調査方法

調査の概要は以下である。まず、被験者は、バンクーバー[2]居住の、英語母語話者の父親と日本語母語話者の母親をもつ、小学生2人である。調査した2家族は、先述した時田 (2008) で扱った「家族A」と「家族B」である。両家族の属性は表1に示すとおりである。

表1　2家族の属性

		家族A	家族B
父親	出身	カナダ	カナダ
	在日経験	なし （短期滞在のみ）	5年 （20代前半）
母親	出身	日本	日本
	カナダ在住	14年	9年
子ども	出身	カナダ	カナダ
	年齢	10歳男児・ 8歳男児	8歳男児

2家族とも、父親はカナダの英語圏で生まれ育った英語母語話者である。図1が示すように、家族Aの父親はほとんど日本語を話さない。一方、図2が示すように、家族Bの父親は母親からほとんど日本語で話しかけられるほど日本語を理解し、父親から母親に対しても日本語で話すことがある。ただし、定型文や短い文が多く、流暢さの側面からは英語に匹敵しない (時田, 2008)。母親は、2家族とも日本で生まれ育った日本語母語話者であり、成人後カナダに住み始め10年前後たつ。2人とも英語は外国語として習得したが、カナダで日常生活を送っており習得レベルは比較的高い。子どもは、英語圏カナダで生まれ、誕生以来、家庭で英語と日本語に接触している。英語で初等教育を受け、週に一度日本語学校で日本語を学ぶ。子どもの数は、家族Aは2人、家族Bは1人であるが、本稿は家族Aの10歳男児 (A-G5) と家族Bの8歳男児 (B-G3) を被験者とする。

データは、家庭における家族間の自然会話から構築したコーパスである。会話は、食事中などの計1時間半から2時間、各家庭の母親が1ヶ月間数回に分けて録音した。録音データは文字転写し、分析に必要な情報を付与してコーパス化した。なお、コーパスとは、「多様な言語情報が付加された、機械可読形式の、書かれたまたは話された、サンプルとなるテキストから成る集合体」(McEnery et al., 2006, p. 4) である。

本稿の目的は、直接的な聞き手でない会話参加者の存在が同時バイリンガル児の言語選択にどのような影響を与えるかを明らかにすることである。図1と図2が示すように、A-G5とB-G3は母親に対して日本語と英語の2言語を使用したが、父親に対してはほとんど英語を使用した (時田, 2008)。ここで、親たちの言語能力レベルについて確認しておく。日本語母語話者である母親は2人とも、高いレベルで英語を習得している。一方、英語母語話者である父親については、家族Aの父親は日本語によるやりとりがなく日本語を習得しておらず、家族Bの父親はある程度の日本語を習得しているものの習得レベルは高いとは言えない。このような父親と母親の言語能力の違いを考慮し、以下では、A-G5とB-G3が母親を聞き手として行った言語選択が、父親が会話に参加している場合と参加していない場合に従って相違を及ぼすかについて分析する。使用したデータは、表2に示すとおりである。

表2　データ

	父親・参加	父親・不参加
A-G5	4回分（計61分）	3回分（計18分）
B-G3	5回分（計66分）	3回分（計37分）

最後に分析の方法について述べる。発話は1行に1文ずつ、日本語の発話は日本語で、英語の発話は英語で、コーパス上に転写した。なお、「文」とは、数秒以上からなる「ポーズ」から「ポーズ」内の発話を指す。まず、文ごとに、話し手、聞き手、使用言語[3]を情報として付与した。そして、話

し手と聞き手の組み合わせごとに使用言語の頻度と比率を算出し、A-G5とB-G3が母親を聞き手とした場合の使用言語の頻度を明らかにした。その次に、父親が参加している場合と不参加の場合ごとに2人の使用言語の頻度を算出し、比率を示した。なお、表2が示すように、2人とも父親参加と不参加における録音時間が大きく異なるため、頻度は使用せずに比率のみを比較することにした。

4．結果と分析

本稿の目的は、直接的な聞き手ではない会話参加者の存在が、同時バイリンガル児の言語選択にどのような影響を与えるかを明らかにすることである。英語母語話者である父親の会話参加状況は、A-G5とB-G3の母親に対する使用言語に相違を及ぼすのであろうか。

まず、A-G5の場合である。結果は、図3に示すとおりである。

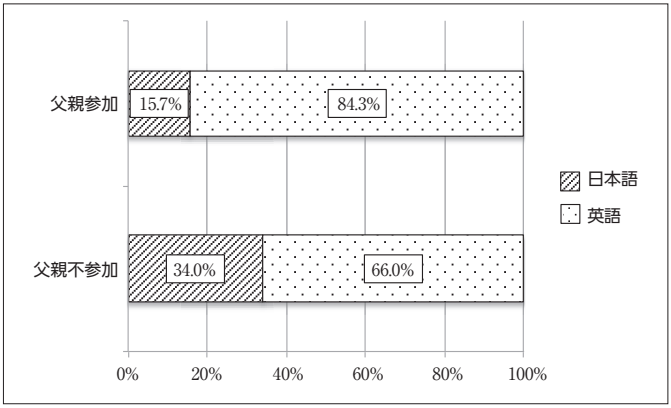

図3　父親の参加状況に従った、A-G5の母親に対する使用言語

A-G5が母親に対して使用した日本語の比率は、父親が参加の場合は15.7%であり、父親が不参加の場合は34％であった。つまり、A-G5は母親に対して、父親が不参加である場合の方が参加している場合よりも日本語を使

用した頻度が高かった。家族Aの父親は日本語をほとんど習得していない。そのため、A-G5は父親の日本語能力を考慮し、父親の会話参加状況に応じて、母親に使用する言語の比率を変えたのである。

次に、B-G3の場合である。結果は、図4に示すとおりである。

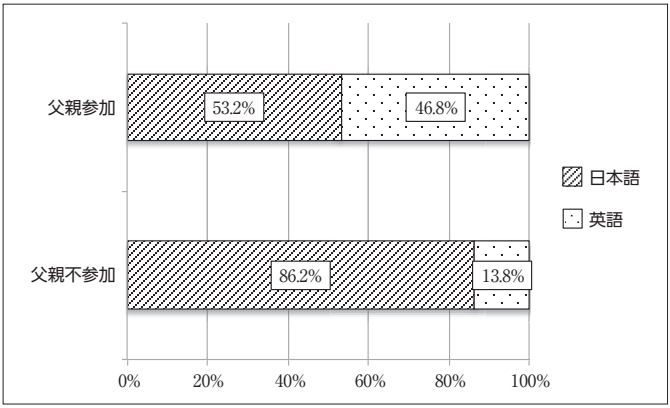

図4　父親の参加状況に従った、B-G3の母親に対する使用言語

B-G3が母親に対して使用した日本語の比率は、父親が参加の場合は53.2%であり、父親が不参加の場合は86.2%であった。つまり、B-G3は母親に対して、父親が不参加である場合の方が参加している場合よりも日本語を使用した頻度が高かった。家族Bの父親は日本語をある程度は習得しているものの流暢とは言えず、英語に匹敵するレベルにはない。そのため、B-G3は父親の日本語能力を考慮し、父親の会話参加状況に応じて、母親に使用する言語の比率を変えたのである。

以上、A-G5とB-G3は2人とも、父親の会話参加状況に従って、母親に使用する言語を選択していた。直接的な聞き手は母親であっても、日本語を習得していないまたは英語ほど流暢ではない父親が会話の場に存在している場合には日本語を使用する頻度は低く、存在していない場合には日本語をより使用する傾向が見出された。これより、同時バイリンガル児は家

族間の会話において、直接的な聞き手ではない会話参加者の言語能力も考慮しながら言語選択をしていることが明らかとなった。

5．まとめと今後の課題

本稿の目的は、国際結婚家庭に育つ学齢期の同時バイリンガルが家族間の会話において行う言語選択の要因を、発話外的側面から見出すことであった。家族間の会話コーパスの分析を通して、同時バイリンガル児が、先行研究が示した「聞き手」の言語能力のみではなく、直接的な聞き手ではない会話参加者の言語能力も考慮して言語を選択していることが明らかになった。この結果は、両親の2言語能力の高さが子どもの2言語使用に結びつくことを示している。本稿の被験者について言えば、父親の日本語能力が英語に匹敵するような高いレベルにあれば、子どもはより頻繁に日本語を使用したことが想定される。それは将来的に日本語の維持につながるであろう。

ただし、同時バイリンガル児の言語選択は、聞き手や会話参加者の言語能力のみではなく、多様な要因が複雑に絡み合い行われる。今後は、会話のトピックや場所などの発話外的要因が言語選択に与える影響を検討する必要がある。

注

1. 母親は子どもに日本語を習得させるため、日本語を徹底的に使用するといったストラテジーを行使している。詳細は、時田 (2011) を参照のこと。
2. バンクーバーの日本語状況は、時田 (2017) を参照のこと。
3. 1文中に2つの言語が使用されている場合は、「基盤言語」と呼ばれる、文を構築するフレームとなる言語を付与した。詳細はMyers-Scotton (1992)

を参照のこと。

引用文献

時田朋子 (2008)「バンクーバーのバイリンガル家庭における言語選択と使用―会話コーパスの分析から―」『外国語教育研究』No. 10, 5-23 頁。

時田朋子 (2010)『同時バイリンガルの言語使用―日本語と英語を話すカナダの子どもたちの場合』博士論文、東京外国語大学。

時田朋子 (2011)「国際結婚家庭における子どもへの言語伝達―バンクーバー在住の日本語母語話者の場合―」『カナダ教育研究』No. 9, 45-51 頁。

時田朋子 (2017)「バンクーバー在住の日系人・日本人の言語使用状況：国勢調査の分析から」『英語英文学研究』No. 23, 63-75 頁。

Deprez, C. (1994). *Les enfants bilingues : Langues et familles*. Paris, Didier.

De Houwer, A. (1995). Bilingual language acquisition. In P. Fletcher & B. MacWhinney (Eds.), *The handbook of child language* (pp. 219-250). Oxford, Cambridge, Mass: Blackwell.

Döpke, S. (1992). *One parent, one language: An interactional approach*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins.

Fishman, J. A. (1965). Who speaks what language to whom and when? *La Linguistique, 2*, 67-88.

Kwan-Terry, A. (1992). Code-switching and code-mixing: The case of a child learning English and Chinese simultaneously. *Journal of Multilingual and Multicultural Development, 13*, 243-259.

Lanza, E. (2004). *Language mixing in infant bilingualism*. Oxford: Oxford University Press.

McEnery, T., Xiao, R., & Tono, Y. (2006). *Corpus-based language studies: An advanced resource book*. London: Routledge.

Mishina-Mori, S. (2011). A longitudinal analysis of language choice in

bilingual children: The role of parental input and interaction. *Journal of Pragmatics, 43*, 3122-3138.

Myers-Scotton, C. (1992). Constructing the frame in intrasentential codeswitching. *Multilingua, 11*, 101-127.

Yamamoto, M. (2001). *Language use in interlingual families: A Japanese-English sociolinguistic study*. Clevedon, Buffalo: Multilingual Matters.